昭和48年8月2日第3種郵便物認可 昭和36年12月5日国鉄特別扱承認雑誌第1197号 昭和60年11月1日(毎月1回1日)発行 第34巻第11号(通巻第422号)

C/N-9

レコード芸術

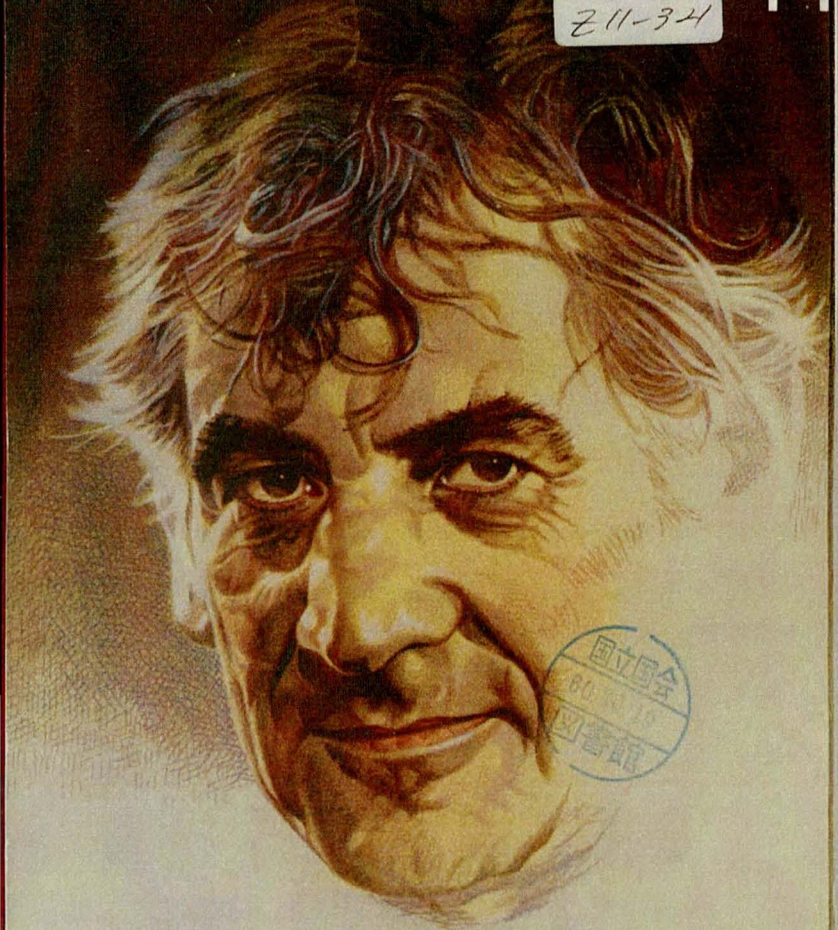
11

THE RECORD GEIJUTSU:1985

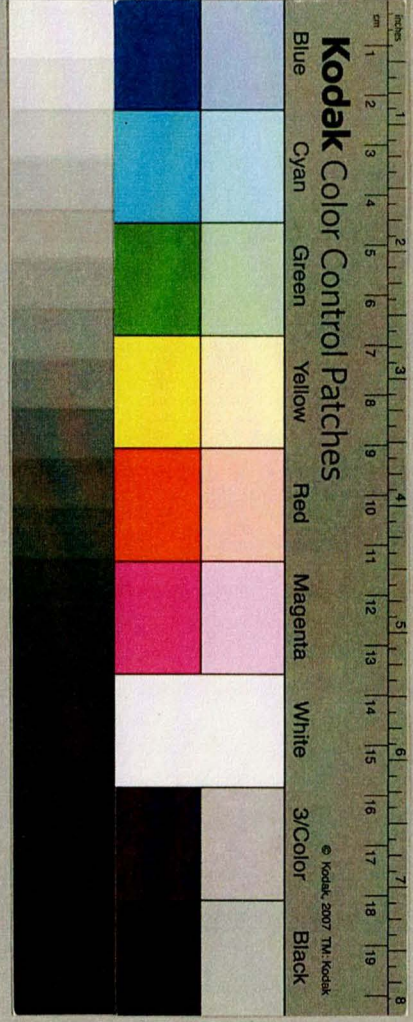
《特集》The 廉価盤—決定盤ベスト100＋シリーズ別徹底紹介

《本誌独占インタビュー》レナード・バーンスタイン

Z11-34



国立国会図書館

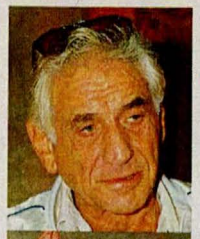


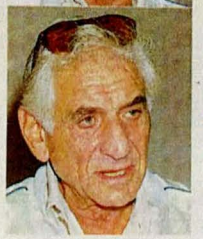
今月のアーティスト

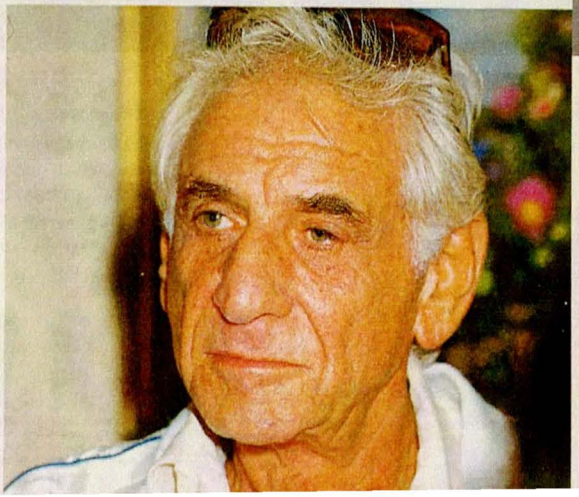
Leonard BERNSTEIN レナード・バーンスタイン

「幸せでいるためには一日に一つの理由があればいい。そうすれば感謝の気持を持てるし、幸せになれる。」

おそらく、好んでインタヴューされる人はいない、と思う。
素晴らしい演奏をする音楽家は、おおむね神経が鋭敏である。
神経の鋭敏な人が、
見知らぬ人間に根掘り葉掘り質問されることを好むはずもない。
したがって、素晴らしい演奏をする音楽家ほど
インタヴューを嫌う傾向がなきにしもあらずである。
しかしながら、こちらがインタヴューしたいと思うのは、
素晴らしい演奏をする人である。
そこにインタヴューというおこないのジレンマがある。

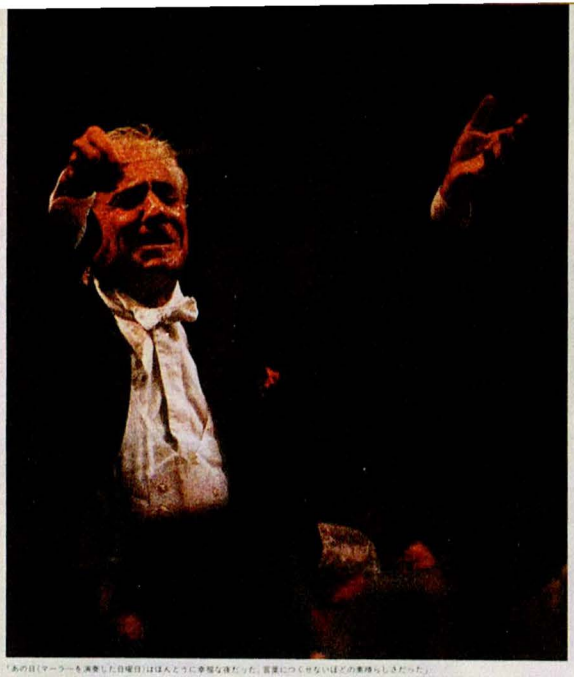






撮影＝服田正巡
取材協力＝日本舞台芸術振興会・民主音楽協会

黒田恭一



「あの日（マーラーも演奏した日曜日）ほどすばらしい夜だった」言葉につくせないほどの素晴らしさだった。

シャイで鋭敏な神経を持ったバーンスタイン

インタヴューする側の人間は相手のことを充分にしりつくしている、さもないと、インタヴューされる側の人は相手のことをまったくしらないことがほとんどである。今度のバーンスタインへのインタヴューにしても、例外ではありえなかった。ぼくは、ものごころついてからずっと、バーンスタインの演奏をききつづけてきたし、その著作を読んできたし、レコードに録音された解説をきいてきたが、バーンスタインが彼の演奏をききつづけてきたぼくをしっているはずはなかった。どこの馬の骨ともしれない人間に、あれこれ尋ねられるのは、バーンスタインのような、シャイで、鋭敏な神経の持主にとっては、どう考えても、気のすすむことではいいがたいに違いなかった。インタヴューされる人にとって歓迎されざる存在である。

その辺のことを考えると、インタヴュアーは、気が重い。自分が相手にとっていらぬ闖入者だと思うと、気持も萎えがちである。ああ、こんなところにくるのではなかった、その場にのぞんで、いつでも、そう思う。とはいっても、恐縮しているだけでは、インタヴューにならない。

これまでのさまざまな面でのバーンスタイン体験から判断して、バーンスタインのような人であったら、きっと、正面きったインタヴューを嫌がるであろうな、と思っていた。案の定、バーンスタインの側から、雑談風にはなす程度ならいいけれど、ともかくシーリアスな質問は嫌だよ、という希望が前もってだされた。さもありなんと、納得した。そこで、小規模なパーティーの席で、ほんの少し時間をさいてもらって、きままにはなしてもらうことになった。

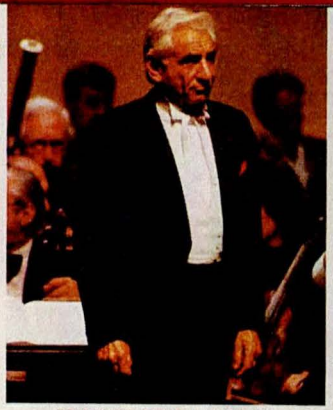
豪快な煙草のすいっぷり

バーンスタインは、予定の時間をかなり過ぎてから、その場にあらわれた。演奏会が終わってから、五十人もの人にサインをしていたため、ということであった。コンサートでのバーンスタインそのまま、周囲の人を楽しい気分

こういう雰囲気の中でインタヴューは進められた。

にさせようと、元気そうにふるまってはいたものの、かなり疲れているな、という印象であった。しかも、側近の人がそっと耳うちしてくれたところによると、バーンスタインは、その日の演奏が非常に不満で、したがって機嫌もあまりよくない、ということであった。

そのときのインタヴュアーは、ナクマデマトウホトトギスの心境で、焦らず、慌てず、機の熟すのを待つことにした。側近の人のいうには、少しアルコールがまわれば、はなす気にもなるかもしれないよ、ということであった。もしはなしがきければ、それにこしたことはないけれど、どうしてもバーンスタインのはなしをきくんだ、といきりたったりしないで、立食形式であったそのときのパーティーでの、バーンスタインの振る舞いを、目で追っていた。



穏やかな熱狂的な始手に何となく恥かしそうな表情をするバーンスタイン

バーンスタインは、そのパーティーの席にいる間中、右手の煙草と、左手のウイスキー・グラスとを、ほとんど切れ目なく、交互に口にはこんでいた。バーンスタインの、最近では目にすることもあまりない、チェイン・スモーカーぶりであった。禁煙を要請した後に記者会見にのぞんだキリ・テ・カナワのことが思い出された。キリ・テ・カナワは、先ごろ発売された〈ウエスト・サイド・ストーリー〉で、バーンスタインと共演した。共演するとなれば、打ち合わせ等で、バーンスタインとキリ・テ・カナワが同席することもあったはずである。そのとき、バーンスタインが煙草をひかえたのであろうか、それともキリ・テ・カナワがバーンスタインの煙を我慢したのであろうか、と思わないではいられなかった。

そのような、いらぬことを周囲の人間に考えさせるほど、バーンスタインは煙草をすった。ウイスキーもよく飲んだ。最近では、演奏家ならずとも、健康に留意する人がふえている。したがって、禁煙する人が多くなっているし、禁煙はしないまでも、節煙をこころがけている人が大半である。そういう時代にあって、バーンスタインの煙草のすいっぷりは、豪快であった。煙草がとだえたときのバーンスタインの右手は、テーブルの上の料理をつまみあげていた。バーンスタインは、箸はもとより、フォークも使わず、素手で料理を口にはこんでいた。

「ぼくがこれまでにきいた最高のマーラーだった」

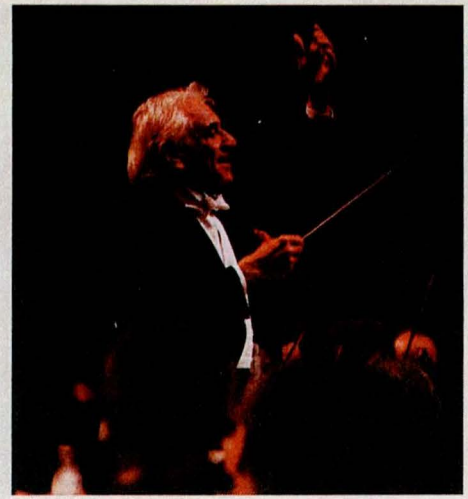
やがて、機が熟した。紹介の労をとってくれたMさんに従って、おずおずと、バーンスタインの前にすすみ出た。質問事項をあれこれ書きつけたノートを手にはしていたが、それを開けるような雰囲気ではなかった。近くでみると、おそらく、疲れと、すでにそれまでに飲みこまれた後に体内を駆けめぐったアルコールのためであろう、バーンスタインの目は、しょぼしょぼしていた。こんなときにインタヴューされるのなんて、さぞや憂鬱しいだろうなと、インタヴュアーとしては考えてはいけないことを、考えたりした。しかし、バーンスタインは、やっぱりバーンスタインだった。嫌な顔をしたりしないで、質問をきく姿勢をとった。

――先日の日曜日（九月八日）のマーラーは素晴らしかったですね。

バーンスタインとはなすのであれば、出来るかぎり率直でなければなるまい、と思っていた。バーンスタインが相手のロからでまかせのお世辞でいい気になるような人とは考えがたかった。九月八日に、NHKホールでおこなわれたコンサートでの、バーンスタインがイスラエル・フィルハーモニーを指揮してきかせたマーラーの〈第九交響曲〉の演奏は、実に素晴らしかった。それで、まず、そのようにいった。

「やあ、きみは、あの日のコンサートをきいたのか！　それはラッキーだったね。あのときあそこにいた人はすべて、幸運な人だよ。あれはほんとうに幸福な夜だった。星占いでも運のいい日だったんだ。言葉にはつくせないほどの素晴らしさだった。ぼくがこれまでにきいた最高のマーラーだった。オーケストラも素晴らしかったし、聴衆も素晴らしかった。」

バーンスタインは、「ぼくがこれまでにきいた最高のマーラーだった」と、いった。これがまさしくバーンスタインだった。バーンスタインは、「ぼくの指揮した最高のマーラーだった」とは、いわなかった。



今やカラヤンと人気・実力ともに今日する大巨匠

「あの日のコンサートがレコーディングされなかったのは、残念だったな。でも、ぼくたちは、アムステルダムで、マーラーの〈第九交響曲〉を素晴らしく演奏して、それをレコーディングした。アムステルダムでの演奏もファンタスティックだった。といっても、アムステルダムでの演奏でさえ、先日の日曜日の演奏ほどではなかったな。日曜日の演奏はまったく信じられないくらいのものだった。ぼくが生まれてこのかた経験したことのないほどの素晴らしい演奏だった。」

「マーラーが、演奏後にぼくに電話でこういったんだ、『今夜はとても興奮したよ』って」

――日本の聴衆があんなに熱狂したのも珍しいことでした。

「いや、ぼくがいいたいのは、聴衆のことではないんだ。ぼくはマーラーのことについてだけいっているんだよ。マーラーはとても興奮していてね、演奏が終わった後で、ぼくに電話してきて、こういったんだ。『今夜はとても興奮したよ』って。」

――ここ数年、日本でも、マーラーの音楽に対する関心が次第にたかまってきているのですが……。

「いや、きみのいうことは、間違っているよ。ぼくは、二十年前にも、日本に来ているけれど、そのときにもすでに、マーラーの音楽は、とても人気があったんだから（註・このバーンスタインの言葉は、一九七〇年に、ニューヨーク・フィルハーモニーとともに来日して、マーラーの〈第九交響曲〉を指揮したことをふまえてのもの、と思われる。したがって、二十年前というのは、バーンスタインの記憶違いであろう。しかし、そのときの演奏もまた圧倒的で、ききてに強烈な印象を残した）。二十五年前にも、日本で、マーラーを演奏しているよ。二十五年前といえば、ぼくが初めて日本に来たときだけれど、あのときの一連のコンサートでは、ストラヴィンスキーとか、チャ

ベスとか、マーラーとか、コープランドといった作曲家たちの現代音楽を、とりあげたんだ。というのは、あのときのコンサートのテーマが二十世紀の音楽だったからなんだけれどね。きみは、あのときのコンサートをきいているの？

――ええ、きいています。

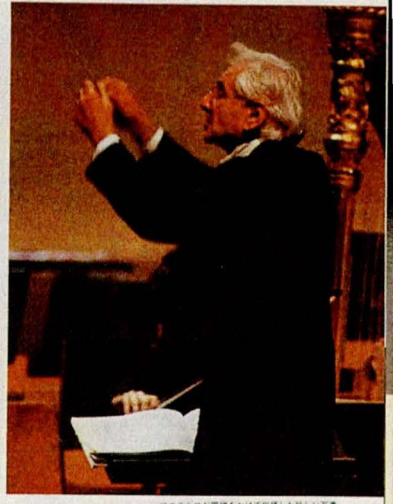
「そうか、きいているのか。たしかあれは一九六一年だったね。」

――そうです。一九六一年の春です。

「あのときは、会場に、ヴァージル・トムソンなども、姿をみせていた。あのときの一連のコンサートには『東西音楽の出会い』というタイトルがついていて、ぼくらは、二十世紀の音楽だけを演奏したんだ。覚えているかい？あのときもマーラーを演奏して、みんな気にいっていたじゃないか。それなのに、なぜ、きみは、マーラーの音楽に対する関心がたかまったのを、ここ数年なんていうんだい？（註・この件に関してもまた、バーンスタインは記憶違いをしていたのではないかと思われる。『東西音楽の出会い』に参加したときのバーンスタインとニューヨーク・フィルハーモニーのとりあげたのは、以下のような作品であって、そのときの一連のコンサートではマーラーの作品はとりあげられなかったように、思う。ハリスの〈第三交響曲〉、バルトークの〈弦楽器・打楽器とチェレスタのための音楽〉、ラヴェルの〈ピアノ協奏曲〉と〈ラ・ヴァルス〉――以上四月二十六日、ヒンデミットの〈金管楽器と弦楽器のための演奏会用音楽〉、ベルクの〈三つのオーケストラ小品〉、チャベスの〈シンフォニア・インディア〉、黛敏郎の〈饗宴〉、コープランドの〈エル・サロン・メヒコ〉――以上五月五日、アイヴズの応答のない質問と〈第二交響曲〉、ストラヴィンスキーの〈春の祭典〉――以上五月六日、その他に、五月二十七日に、東京体育館で、バーンスタインの〈第一交響曲「エレミア」〉が、演奏された。）

「実は、あの年に、ぼくは、マーラー・ツィクルスを始めたんだ。あの年はマーラーの生誕一〇〇年の年だったしね（註・マーラーの生まれたのは一八六〇年であるから、正確には、マーラーの生誕一〇〇年は、バーンスタインとニューヨーク・フィルハーモニーが初来日した前の年ということになる。もっとも、このときのバーンスタインはいくぶん酩酊きみであったから、記憶のうえでの一年の誤差は、やむをえないことというべきであろう。だから、今年は、マーラーの生誕一二五年ということになるな。）

一九六一年のコンサートでマーラーの作品がとりあげられたかどうか、こっちの記憶も確かではなかった。したがって、そのときにもマーラーの作品をとりあげたというバーンスタインの言葉を踏まえて、このようにいってみた。



マエストロが微笑をかけて指揮した珍しい写真

「日本でマーラーを演奏することは、とてもエキサイティングなんだ」

――でも、あのときの日本でのマーラー熱は、今ほどではなかったと思いますが。

「だって、あのときだって、切符は売り切れだったよ。」

――それは、あなたが指揮なさったからだと思いますが。

その言葉に対して示したバーンスタインの反応に、ぼくはとても感動した。

「いや、まあ、それはそうかもしれないけれど……」

そういって、バーンスタインは、そのことについてはあまりはなしたくないといった様子で、テーブルの方にふりむき、盤に入ったままのウニを手にとって、口に入れた。そのときのバーンスタインは、自分が指揮をしたために切符が売り切れたのだといわれて、あきらかに恥ずかしがっていた。いまや名声の絶頂にある六十七歳の男が、まさかそのようなことで照れ臭そうな表情をみせるとは、考えてもいなかった。臆病なインタヴュアーが、はなしの継ぎ穂を失って、どぎまぎしているのを、いちはやく感じとった優しいバーンスタインは、さらりと話題を変えて、はなし始めた。

「それにしても、日本でマーラーを演奏することは、ぼくにとって、いつでもとてもエキサイティングなことなんだ。みんながとても静かにきいてくれるし、とてもビューティフルだ。日本の人たちは、ニューヨークやパリの人たちみたいに、喋ったり、咳をしたりしないしね。日本の演奏会場は、まるで教会か神社の中のように静かじゃないか。とても素晴らしいことだよ。」

さすがに軽やかとった感は否めないが、相変らずダイナミックな指揮ぶりだ

――先日の日曜日みたいな凄い演奏がどうして可能だったんですか？　黒問であることは百も承知のうえで、しかし、バーンスタインがどのようにいうのか、それをしりたくて、どうしても尋ねてみないではいられなかった。

「わからないよ、ぼくには。それは批評家への質問だよ。どのように答えたらいいのかわからないな。ぼくはあそこで仕事をしただけなんだ。ぼくは雇われ人だよ。ぼくはただのハードワーキングなミュージシャンだ。ぼくは、イスラエル・フィルハーモニーのために、ブラームスのために、そしてマーラーのために雇われた人間なんだ。やりなさいといわれたことをやるだけだよ。今日の演奏と日曜日の演奏の違いの原因をいうのは、きみの仕事だよ。」

「ぼくはいつだって、その時一番したいことをしているんだ。それがぼくのやり方だよ」

――今、もし充分に時間があったら、なにをなさりたいですか？

「もし、その答えをぼくがしっていたら、とっくにぼくは、そのことをしているよ。いつだって、そのとき一番したいことをしているんだ。それがぼくのやり方だよ。」

――そうしますと、どのようにお過ごしになる一日がもっとも平均的な一日ということになるのでしょうか？

「ぼくには平均的な一日ってないんだ。毎日が違っている。午後四時まで寝ていることもあるし、八時に起きることもあるしね。走る日もあれば、スカッシュをして楽しむ日もあれば、勉強する日もあれば、手紙を書く日や読む日もあるといったように、毎日が違っているんだ。」

――そのように毎日をお過ごしになっていて、お幸せですか？

「毎日が幸せか？って。きみは毎日が幸せかい？　答えられない質問だよ。毎日が幸せな人なんていないよ。でも、ぼくは、他のたくさんの人よりは幸せだ、と思っている。ぼくはとても恵まれていたと思うし、そのことについては感謝している。多くの面でぼくは恵まれているからね。今、幸せか？　といわれれば、答えは、イエスだよ。なぜって、今は、ウニがとても美味しいからね。幸せでいるためには、一日に一つの理由があればいい。そうすれば、感謝の気持を持てるし、幸せになれる。一日に一つでいいんだよ。日曜日はマーラーが素晴らしかったし、今日はウニが美味しい。それで充分だよ。明日はまた、なにか別の理由があるといいのだけれどね」

さらにバーンスタインは、こちらが質問をつづけさえすれば、答えてくれそうにしていた。しかし、演奏会が終わってから五十人もの人にサインをしたバーンスタインが疲れていないはずはなかった。相手が断れないのをいいことに質問をつづける勇気がぼくにはなかった。それで、インタヴューは、ここまでにした。お疲れのところを、ありがとうございました、といったら、バーンスタインは、いや、きみのインタヴューは楽しかったよ、といってくれた。

パーティー会場を出ていくときのバーンスタインは、疲れのためか、それとも酩酊したためか、いくぶんふらふらしているようにみえた。どうぞ、煙草と酒をすこしひかえて、身体に気をつけて下さいと、母親が息子にいいそうな言葉が、口からついでてそうになったが、むろん、いわなかった。